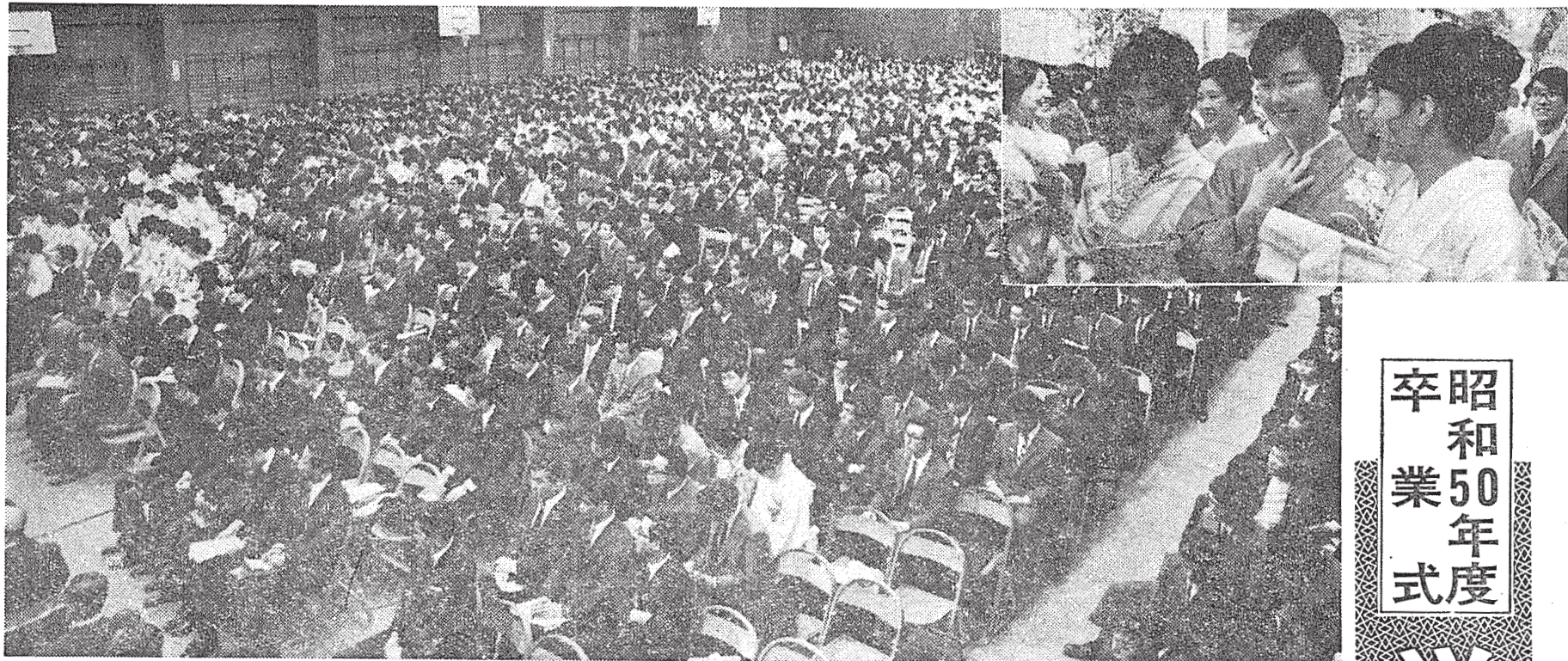


第 63 号
広報委員会発行

関西大学通信

大阪府吹田市山手町3丁目
関西大学広報委員会



昭和50年度
卒業式

巢立つ若い力

新学士
四六一
一名誕生

昭和五年度卒業式は三月十五日(木)に行なわれ、四六二名の新生が誕生する。この日新しく巣立つて行く卒業生は、法学部第三部六〇名、第二部五二名、文学部第三部四七九名、第二部八四名、経済学部第三部六九名、第二部一四二名、商学部第三部五五五名、第二部九〇名、社会学部第三部六八名、第二部一四四名、工学部二一〇名である。

また、大学院においても三月十七日(土)修士課程修了者ならびに博士課程所定の単位取得者に對し、それぞれ学位記あるいは単位取得の証書の授与式が行なわれる。修士の学位授与される者は法学一六名、文学三三名、経済学四名、商学四名、社会学三名、工学七七名の計一四七名であり、博士課程所定の単位取得者は法学二名、文学一名、経済学五名、社会学四名、工学三の計三名である。

新卒生は、味で新なつた變化の中にわたソフレと脱出地獄

た。大学も、良きにつけ、悪しきにつけ、いつた経済的変化の影響からのがれることはできない。むしろ、ある意味では、今年の卒業生などが就職に際して最大の影響を蒙ったといえよう。

関西大学も、私学全体の危機が進行する中で、理事会、教授会、組合など全学をあげて国庫助成運動に取り組んできたが、五十年年度の学費改訂を避けることはできなかった。その際、多くの学生がレポート試験を体験したことは記憶に新しい。国庫助成自体、新立法により換振期を迎えたが、問題はまだまだ多く感ずられる。

この間、長年の懸案である大学改革も種々の問題が検討されつつ漸次的に前進をみた。部活問題、公営問題、身体障害者等の問題、教課程改革問題などがそれぞれあ

る。すでに本学では四十七年度より教職課程「部活解放教育の研究」二単位が設置されていたが、同年四月部活問題委員会が発足し同課程の通年必修化が実現した。また、四十九年には部活問題研究室が設置され、五十年には一般教育科目に総合コースが開設された。この中に「部活解放論」が含まれている。また一般教育等研究センターの設置も決められた。

学内施設も着実に改善をみつつある。四十九年に大学院学舎の改築、法学部、文学部研究棟の増築、経済学部、商学部、社会学部研究棟の増築、工学部実験実習場の改築がおこなわれ、五十年四月には飛鳥文化研究所・植田記念館が完成し、セミナー・ハウスとしての利用もすでに数多い。

大学院は五十年に新制度へ移行し

言葉はその語される時や場所によって重みが変わる。一ぱい飲み屋で友人と酒を飲みかしているときと、公の場で述べるときとは、その言葉に対する話し手の責任がまるでちがう。それは人に与える影響がものずと異なるからであつて、大学

今年も三に四千名を超える卒業生諸君を世に送る。一株のさびしさとともに大いなる喜びを禁じえない。卒業生諸君に対し心から祝福の辞を送るものである。祝詞は小・中・高の過程をへて、最高学府たる大学を卒業し、其社会に出発するわけであるが、その間の長い学校生活を顧みて万々感謝に堪まるものがあることであらう。

学長 明石三郎

卒業生諸君へ贈る



で陰に陽に雷吉を支援し、指導し、下さつた西觀をはじめ雷先生や、先輩達に対して感謝の意を表すべきである。今日あるは根本には唯君の努力によるのであるが、それを支えた陰の力に目を向けて、それに感謝の心を捧げることはよいことである。偉大な人間の最初の試験は彼の謙遜であることはラスキンのいった言葉であるが、社会へ第一歩を踏み出すに当たってまず謙遜

失敗を恐れずに

時にはマイナスに賭ける気概

指導者たちと云ふ気概を失つてはならない。將來の日本を背負うのは諸君であつて、諸君の知性と若い力による努力に對して社会は大いなる期待をもつてゐることを忘れないでほしいと思つた。

諸君は大学においてそれぞれの分野で専門の學問を學んだわけであるが、これから實際にたずさわる職業はむしろ大学で學んだ専門の學問とは直接に關係しないものが多いと思はれる。したがつて時には大学を出ていても金く役に立たないなど上戸から小言をいわ

ある。高い理想をかかげるとともに、自己の自分を自覚し、決して焦ることなく着実に研鑽を積んでゐたきた。

諸君はこれからは、學校という閉ざされた温室的な學問より社会という開かれたきびしい學問に入るわけである。その氷い社会生活のうちには、必ず一度や二度の大失敗をすると思はれる。しかし失敗を恐れていては何事でもできない。「青年は決して安全な株を買つてはならない」といったのは詩人のジャン・コクトーだった

くこのうのは必ずしもやさしいことではない。殊に國內的にはきびしい不況に加えて政治情勢も不安である。こうした中へ飛落つていく諸君の前途はなまやさしいものではないと想像される。しかし諸君は若さやバイタリティーをもつてゐるはずである。その若いエネルギーと大学で學んだ知性を發揮してその困難を克服してゐたきたい。問題が困難であればあるほど生き甲斐を感ずるものである。將來における世界の平和と人類の幸福とが、若い諸君の双肩に

質文明に慣れすぎる結果となり人肉の魂が忘れられちである。文明を駆使し、方向づけるのはその車心の置き場所によつては文明の方向も変わつてくる。日常多忙のうちにも裸の姿に焼つて魂を磨くことをし、自己の生へべき道を反省することが必要であらう。

若くして春秋に富む諸君、本日は諸君の卒業に当たり心から祝福を贈るとともに、健闘を祈つてやまない。

式主 ほんまにたいていこうな表現から抜けてないのではなかつたか▼カの場合の発言も国会の証人の場合とは偽証は許されてははずである。ところが最近のロッキード事件の証人喚問を聞いてみると、日本語の表現にはいやに抜け道の多い便利さがあるという感じをぬぐえない。「お答え申し上げます。私は存じておりません」と、証人はくり返す。このなんの変哲もない言葉の裏にホンネがかくされていると疑うのは、日本語に対する不信心からなのだろうか。

(H・F)

Dr. Robert M. Anderson
 Director, Center for Health Systems Research and Analysis
 University of Maryland School of Medicine

敗戦直後の 思い出から

文学部教授



校は縮小されることになった。予科たつていふ言へば専任は大小島子科長のもとに、英文の山田・八島の両先生、それに西洋史の村田先生の四人となったのである。その村田先生も嫌気がさして辞退されたので、専門部からわたりがたしが模した。漢文の神田先生の北白川のお宅にもわたりが使に立っている。先生のはあい、専任として迎えてきなかったが、しばらく非常勤として「足旁置」なことであつた。それもこれも今は昔といえようか。

大学を去る
に当たって

「後世畏るべし」

▲文学部教授▼



人は年を取るにしたがって回

「何事も今は普に及ばない」といふ口物を弄するようになる。食へ慣れた料理や菓子にしても、
「落した」のは老人自身の味覚のほつてであつて、それを相手のせいにしてゐる人が、多いらしい。

豊かへし。いへんや乗船の令に如かざるを知らむ」とある。後生とは後輩のこと。後輩がやがてわれわれを追い抜くかも知れない。輕んじてはなまじい」と戒めているのである。――さすがに孔子は賢人で自信が強いから、「後輩が追い抜くかも知れない」といふ、「やう簡単にには教養せぬぞ」といふ意氣をこめてくるやうに見える。

とてやがわたのよきな凡とは

は取つても意氣さかんで、若い人々に伍して頑張る人は少なくない、それも大いに結構ではあるが、しかとそれぞれの道において新陳代謝してゆくのが、自然の理であり、これを原則として社会の進歩してゆくには、いかに言うまでもない。――わたしは、関大という大河が、流れに淀みなく常に刷新で、まはまはまはまの流転を調へて流れていくを祈ふ。

大学の恵まれた
自然環境を大切に

工学部教授



昨年には「公害と環境問題」という総合コースが開設され、私も他学部(の)学生諸君に講義ができたので、関大の学生諸君を広く知ることができた。大学においては教員と学生が一体となって、教育、

研究することが極めて望ましい。
学際的研究ができるのは総合大学の長所であるから、今後一層の学際的研究の発展が望ましい。

この七年間に関大は変わった。
もとより、これは社会情勢の変化

學問と人格の陶冶

小島
俊二



それでも尚かつ大学というところ
がこんなにもおごれの的となる
理由は何でしょうか。それがただ
卒業後の生活安定を意味するとい
うように考えられたしたのは戦後
の事ではないでしょうか。

火をつけ、お好きなお酒を、馳走
して下さいました。書家としても
立派な作品を残しておられます。

私は大学で利害を越えた友情を
知り、尊敬と信頼を知り、忍耐と
根性を培ったと思います。

私が大学にあこがれた大正末期には、大学を卒業すれば将来の生活設計が良好というような安易なものでありません。何かをやろうと、学生諸君にとって、今は貴重な大学生活が進行中です。学園の研究と相俟って人格を陶冶しなければなりません。人生の中では僅か

生であつたころ、林鶴一先生が中学
 生で一般の風潮として誰知らぬ
 又は数学の権威者として誰知らぬ
 資があつたところで、私はその先
 生が一般の風潮として誰知らぬ
 生であつたころ、林鶴一先生が中学
 生で一般の風潮として誰知らぬ
 又は数学の権威者として誰知らぬ
 資があつたところで、私はその先

林先生は、温厚で磊落（らいらか）な先生に接して数学をみっちりやってみたくて、それが目あてで勉強したものです。

（あんまりほめすぎた？） 関大を若者のあじがれの大学にするため、誇り高き関大のためがんば

く、学生を孫のように暖かく抱いて下さい。

大坂に生まれ大坂に育ち大坂につとめ、生涯を大坂に生きた私は関西大学を心から愛します。益々

本号では、三月の通信においてなかは恒例化してきた「卒業生に贈る言葉」をとりやめ、かわりにこれを縮小して、特集「學立ちゆく若き友へ」の中に吸収した。

今年度多くの学生が私学の危機ととぞこの中にあるさすから危機とを切実に体験しつつ卒業する。しる卒業生諸君も一段とたふまへ成長するに違いない。その中で本号の特集が忘却の命運をまぬがれれば編集の喜びの上もな。

退職される教職員ならびに今年度卒業生の御多幸と御活躍を祈る。



◀編集後記▶